平成１２年１２月８日　発行

北海道国際理解教育研究協議会　会報第４８号

会長　高橋　承造　　事務局長　真木　孝輝

第２１回全道国際理解教育研究大会胆振・室蘭大会の開催に感謝して

胆振国際理解教育研究会
会長　木山春生
（室蘭市立御前水中学校長）

去る１１月１日（水）、２日（木）の２日間、第２１回全道国際理解教育研究大会が室蘭市にて開催されましたが、全道各地より約４００名を越える参加者をお迎えし、盛会のうちに終了することができました。ここに、関係者各位並びに参加者の皆様方の温かいご支援、ご助言に、厚くお礼申し上げます。

本研究大会は、全道研究協議会における第５次にわたるこれまでの研究計画に基づく研究の成果と課題、第６次の研究主題を受け、胆振国際理解教育研究会の地域性と過去の研究をもとに、「共生の心を持ち、自ら課題を解決しようとする自己の確立を目指して」を副主題として研究を進めました。基本目標を北見大会の６つに、個の確立・個性の尊重、相互理解・相互交流を新たに加え８つの目標にして研究の視点と関連を図り、研究仮説を設定し、検証することにしました。研究の具体化として「国際理解教育の基本目標とめざす子供像の検討」「子供の変容を確かめ、指導に生かす実態調査」「視点やねらい、育てたい力を明確にした授業構築」「身近な教材化等による単元開発」「問題解決学習、探求、調査、表現等の多様な学習活動の重視」「国際理解教育を中心に据えた総合的な学習の時間の実践」等を柱として、発達課題と一貫性を踏まえた研究実践をめざして開催しました。

本研究大会を振り返ってみますと、第１日目の午前中は「子供達が課題意識を持って、主体的に取り組み、表現したり、共に学び合う多様な活動が見られた幼・小・中・高の公開授業」昼の休憩時には「登別温泉中学校の生徒による郷土伝承芸能の熊舞のアトラクション」午後には「画面一杯にパソコンを駆使しての全道第６次研究推進計画と研究の概要と胆振の研究の概要の発表」「瀧澤ジェーン氏による日本在住２２年間の文化や生活習慣の違いからの体験の中で驚きや困惑をユーモラスで大変示唆に富むご講演」「公開授業と授業反省に基づく活発な研究討議」「楽しく和やかな交流交換会」第２日目は、４つの課題別分科会での全道各地の先進的な提言に基づき熱心な討議と交流がなされました。

これらの研究により、国際理解教育の課題やあり方が明らかにされるとともに、いくつかの新しいメッセージが全道に発信され、北海道における国際理解教育の一層の充実・発展につながることができれば幸いに思います。

当研究会にとっては、これまでの経緯や大会規模等から不安を抱えてのスタートではありましたが、大会を開催することにより学ぶことが多く、そして会としての組織と活動がより強固なものになったことに対しても改めて感謝申し上げます。皆様から賜りました温かいご指導とたくさんのご教示を謙虚に受け止め、より一層の研鑽に努める所存です。

最後に大会開催のために、後援、協賛いただいた関係諸団体、ご来賓をはじめ講師、助言者、授業者、提言者、司会者、記録者、および運営に携わった方々、そして実行委員の皆さんに心から感謝申し上げます。

報告　第２１回北海道国際理解教育研究大会
胆振・室蘭大会

【授業別分科会　幼稚園部会に参加して】

登別市立緑陽中学校
教諭　浅田慎市

１１月１日　水曜日

ベネディクト幼稚園において、年中（さくら、すずらん）組、及び、年長（ばら）組の３クラスが保育公開を行いました。

さくら組では、制作～プレゼントを作ろうという題材にそって保育が展開されました。プレゼント作りをしながら、色々な国の特色を知り、友達と協力しながらコミュニケーションをとり、「プレゼントを喜んでもらいたい」という気持ちを育てるという観点で保育が行われました。

すずらん組では、買い物ごっこ～英語で遊ぼう～　という題材にそって、友達との関わりを身につけるとともに、大きな声で自分の意見や考えを発表する力をつけることや、日常生活で耳にしている簡単な英単語を取り入れて、品物の買い方・売り方等を遊びの中から身につけさせることを視点に保育が進められました。

ばら組では、保育を通して、異文化理解の増進・深化をはかろうということで、クラスにいるガーナ人の子供の母親を講師として招き、ガーナとはどういう国なのか、あるいは、日本との違いは何なのか、などについて知ったり、考えたり、質問する等の学習を進めていました。もちろん、ガーナ以外の国にも目を向けたり興味を持たせていこうという観点の盛り込まれた保育が公開されました。

午後から、室蘭市宮の森町にある蓬莱殿において、幼稚園部会の分科会が行われました。ベネディクト幼稚園の方から、提言された点は、

（１）普段どのようなことを目的として、保育しているか
（２）国際理解のための取り組みについて
（３）今回の設定保育をどのように取り入れていったか

の３点でありました。

国際性を養う幼稚園の英語教育のあり方についてや、あるいは、しっかりとした日本人の育成（隣の子への思いやりや一人ひとりの発想を大切にする）などの点について、参加された先生方から活発な意見や実践が交流されました。そして、遊びを通しての総合的な教育をこれからどのように進めていくべきかという点に沢山の意見が交流し、限られた時間の中では、なかなか方向性を見いだせないまま分科会を終了いたしました。

報告

第２１回北海道国際理解教育研究大会
胆振・室蘭大会

【授業別分科会　小学校部会に参加して】

苫小牧市立緑陵中学校
教　諭　　能　登　敬　久

１．公開授業

（１）　生活

「とびだせ　たんけんたい」

ALT のマーティン先生との TT ではじまった。ショッピングを行う中で友だちとのコミュニケーションを交わしていった。中に ALT や参観の先生方も加わり、社会生活に必要な資質を試される場面も見られた。工夫された TT により、子ども達の意欲も高まり、国際社会に生きるための基礎・基本を無理なく培っていた。

（２）　国語

「雪わたり」

子ども達による自主的な話し合いにより、授業が展開されていった。この話し合いから相当な鍛錬と子供たちの思考力や表現力の深まりが感じられた。教師の温かい眼差しとそれに素直に応えようとする場面が印象的であった。日本文化の理解が国際理解教育においてどのような関連を持たせるのかを想像させてくれた。

（３）　総合的な学習

「目指せ　産業博士」

子ども達の調べ学習を軸にして、それらを自分たちの方法でまとめ、参観者のいる前で一生懸命発信していた。課題解決を進めていくうえで、外国とのつながりに直面し、あらためて国際理解教育の必要性を感じさせる場面も見られた。現在注目されている授業でもあるため、多くの参観者で熱気があふれていた。

２．分科会の話し合い

（１）　授業の視点

① 課題意識を持って主体的に授業に取り組んでいたか。
② 学習の過程で共生の心を育てる工夫が見られたか。
③ 共に学び合う活動の場が設定されていたか。

（２）　授業反省

共通の視点は、コミュニケーション能力の育成であり、これは胆振国際理解教育の４つの柱でもあり、この能力の育成を各教科や各領域からどのように支援していくのかが話された。どの子ども達も信頼関係を基盤として、意欲的に活動に取り組んでいたことが成果としてあげられていた。課題としては、支援の仕方にもう少し工夫が必要であったことを述べられていた。

（３）　話し合い

国際理解教育のねらいと各教科のねらいのどこに差があったのかをめぐって論議が進められていた。教科では到達できない場面の設定が、国際理解教育においては欠かせない視点であるという指摘も受けた。その視点を各教科や他の領域においてどこまで支援することができるのか。総合的な学習の課題にも例示されている国際理解を、発達段階を考慮しながら迫っていくかがこれからの課題でもある。

（４）　指導助言

時間がもう３０分ほしいところであったが、これらの授業と話し合いの中から感じたことを２つ話していただいた。１つ目は、コミュニケーションの重要性であり、希薄な人間関係が露出してきている現在、国際化を迎えている日本においてこの資質の育成は絶対に欠かすことはできない。それは、日常の信頼関係の構築からはじまるものでもあるということである。２つ目は、一人一人が考えをもつという視点である。これは自己の確立にもつながってくるのであるが、この価値観がなければ衝突も理解もあり得ない。この価値観をさまざまな形で表現させていくことが、国際理解教育に必要である。そのために、発信型の授業が今後ますます重要になってくるであろう。

報告

第２１回北海道国際理解教育研究大会
胆振・室蘭大会

【授業別分科会　中学校部会に参加して】

白老町立竹浦中学校
教　諭　　細野輝彦

100 名以上の緊張感と期待感がそこにはあった。

やはり、「総合的な学習の時間」の先進校の提言だけあって、最初から最後まで、メモをとるペンの音は絶えることはなかった。いかに関心が高かったのか、そのことからもわかるのではないだろうか。

中学校の授業別分科会は、室蘭市立御前水中学校にて行われた中学１年生の社会と国語の教科と中学２年生と３年生の異年齢集団による総合的な学習の時間の授業を振り返り、質疑応答や研究討議が熱心に行われた。

研究討議の柱は、「教科および総合的な学習の時間を通して、生徒の表現力をどう向上させていくか」、すなわち、コミュニケーション能力の育成であった。研究討議の中心は、やはり、「総合的な学習の時間」についてであった。

御前水中学校では、自国文化理解、相互理解・相互交流、表現力の向上、個の確立と個性尊重といった国際理解教育を中心に据えた「総合的な学習の時間」の研究が行われていて、注目を集めていた。御前水中学校では、相手を認め、自己を表現し、自分をわかってもらうことがこれからの２１世紀を生き抜く生徒にとって必要不可欠な力であるとおさえ、「コミュニケーション能力の育成」を目指して、教科と総合的な学習の時間から研究を推進している。特に、「総合的な学習の時間」では、「ふるさとウッチング」というテーマで、「未来の室蘭を考えていこう」という活動を試み、今年は、「コンビニ」「噴火湾」「クリスタル」「スポーツ」「鳴り砂」「クジラ」「焼き鳥」と生徒たちにとって、身近な７つのトピックを生徒たちに選ばせ、それぞれ興味や関心が一致する者同士の異年齢集団を形成し、それぞれの視点から、今の室蘭を調べ、現状を見つめる活動を行っている。その中で、生徒たちは、さまざまな体験活動を行い、自分達の力で得た生の情報を元に、自己表現力をめざし、その結果を他の生徒にわかりやすく発表するといった実践が研究大会当日に公開された授業であった。今後の展開は、「未来の室蘭はどうあるべきか」を各グループの中で話し合ったり、ホームページを作成しさまざまな人と意見交換を行ったりしながら、テーマをまとめたり、深めたりすることになると猪股教諭は説明していた。

その後、異年齢集団の作り方、テーマの分類方法、地域社会との関わり方、効果的な評価の仕方など、どの学校でも抱える悩みなどを出し合いながら、どのようにすればよいのかといった雰囲気の中、研究協議は終わった。

最後に、室蘭市教育研究所主任所員の奥崎敏之先生から貴重なアドバイスがいただけた。評価については、「Portfolio 評価」を実際に取り組む上で、効果的なやり方を紹介していただいた。また、学習内容の範囲や課題の設定の仕方などから「総合的な学習の時間」を分類し、どうすればより発展させることができるのかといった方向性も示唆していただき、とても参考になる講評であった。

報告

第２１回北海道国際理解教育研究大会
胆振・室蘭大会

【授業別分科会　高等学校部会に参加して】

室蘭市立港南中学校
教　諭　　藤田祐二

授業別分科会高等学校の部は、２５名ほどの先生方の参加をいただき、苫小牧総合経済高等学校・河合宣孝先生の司会で進められました。

まず、授業を公開してくださった聖ベネディクト女子高等学校の飯島淑江先生とロバート・ベイヤー先生から授業についてのコメントがそれぞれありました。飯島先生は「今回の授業では環境問題について知るということ、並びにディスカッションする際の表現を身に付けることが目標であった。その中で、ディスカッションについては回を重ねるたびにテーマへの興味が高まり、国境を越えた環境問題について話し合う機会が与えられた点においても生徒が主体的に取り組めたと思う。今後は政治や経済などのトピック、他教科との関連を図りながら、さらに発展させていきたい。T・T については、これから確立していく段階にある。JTE は主として教科書購読の際に援助をするが、生徒の表現を細かく指導できるのはネイティブの先生ならではであり、大変効果的である。」と話されました。また、ベイヤー先生は「今回の題材は５月からの取り組みで、現在まで少しずつ成果を見せてくれた。言語学習は学習者にとってとても緊張し、負担に思うことがある。したがって、生徒をリラックスさせることも ALT の大事な役目であると考えている。次回のディスカッションを扱う授業では、生徒が自ら必要な表現を選んで構成するところまで発展させたい。」と話されました。新しいことを進んで取り入れようとする両先生の積極的な姿勢がお話の中から十分に伝わってきました。

続いて質疑応答では、まず「中学校で同様のことを試みた場合、単語だけの受け答えになることも考えられるが、意思が伝われば十分なのか。」という質問が出され、「第二言語を学ぶ者としてはできるだけすべてのセンテンスで言うことを意識させたい。」と返答がありました。さらに「ディスカッションをする上で理想なのは、できるだけ言語能力が均一な２０名前後のクラスを編成することである。」と付け加えられました。次いで、「ALT と JTE のバランスがよかった。特に ALT の視線、表情など、アットホームな雰囲気を作り出していた。生徒にとって『話した・通じた・うれしい』が体感できるすばらしい T・T であった。」と感想が出されました。最後に「生徒が自分の英語で外国人に意見を伝えようとする場面を作り出す大切さを感じた。他校でも少人数クラスや T・T 出なくとも実践できる方法はないか。」と質問が出され、「一クラス４０名の学校では少人数クラスを編成することは難しい。したがって小グループに分けたり、個人的にアドバイスを与えたりすることで生徒の意欲を喚起するしかない。」と返答されました。

続いて研究討議にうつり、感想を含めて４点ほど出されました。まず高校の先生から「本校では普通科と英語科があり、最近ではインターネットを利用している。その一方、英語

科を重点に ALT が配置されたり、普通科では大学受験を前提とすると、どうしてもコミュニケーション活動重視にはなりきれないのが悩みである。」とお話がありました。次いで、高校の先生から「本校では修学旅行先に韓国を選び、英語の語学研修を兼ねている。自分たちと同じ韓国の高校生との英語による会話を通して生徒にとってはとてもいい機会となっている。日常の授業では少人数制のクラス編成がしやすい学校である。」というお話が出されました。次いで高校の先生から「『異文化を知り、心を通わせる』というテーマで授業を展開することがある。時にはギター一本で音楽を通じた交流があり、一日一つの会話でも外国人の生徒や先生と接する機会そのものが意味のあることである。」と実践を紹介してくださいました。最後に、授業者に「生徒同士が意見を交わしたり、教師からアドバイスをする場合には必ず英語で行われるのか。また、辞書の活用はどうしているのか。」と質問があり、「理想を言えば日本語を使わないほうがいいが場合による。辞書については一般的に辞書を使って授業を進めることは避けたほうがいいと思う。今回の授業では教師側が予期しない単語が出てきていたが、次回の授業でそのような単語をリストアップして練習するようにしている。」とお答えがありました。

最後に助言者である苫小牧市教育委員会指導室長の中村恒司先生より研究討議のまとめをいただきました。「生徒の学ぶ姿、達成感のある授業、T・T の進め方、教材研究等、大変感銘を受けた授業だった。討議の柱である T・T の効果的なあり方については、生徒の個を大切にする、教師間の力量が高まるという意義を踏まえて、生徒に学びたいという気持ちを持たせる学習に転換する必要がある。」とまとめられ、最後に生徒に生きる力を与える源となり教師側の指導観を見直すヒントとして、「生徒に何を教えるか」というより『生徒の何を育てるか』、「生徒に何をさせるか」というより『生徒は何を望んでいるか』、「生徒に何ができたか」というより『生徒が何をしようとしてきたか』、「生徒がこれまでどうだったか」というより『生徒がこれからどうしようとするのか』と４点挙げられました。

わずか１時間１５分という短い時間でしたが、質問・意見が途切れなく出され、充実した研究討議でした。特に中学校・高等学校とも実践的コミュニケーション能力の育成を図る授業づくりが求められている今日、聖ベネディクト女子高等学校の実践が参会者に多くの示唆を与えてくださったことは言うまでもありません。今後、各学校で国際理解教育を進める上でも、本分科会での成果を日常実践に鋭意、取り入れていきたいと感じました。

報告

第２１回北海道国際理解教育研究大会
胆振・室蘭大会

【課題別分科会　第１分科会に参加して】

登別市立登別小学校
教　諭　　根塚修正

テーマ
学校における国際理解教育の教育課程

冬の足音が聞こえてきた１１月１日、２日、全道各地から３００名以上の先生が胆振・室蘭に集まりました。２日目に課題別に４つの分科会が開かれましたが、第１分科会は「学校における国際理解教育の教育課程」というテーマ、「学校の実態に即した国際理解教育の計画と実践」、「国際理解教育を目指す総合的な学習の試み」、「国際理解教育を深める教師の研修」という柱にそって分科会が進められていきました。

５０名ほどが参加したこの第１分科会では、４人の先生から提言をしていただき、主に国際理解教育の計画と実践について話し合いました。一人１０分程度の限られた時間ではありましたが、各学校で行われている生の実践を聞くことができました。

１４年度から「総合的な学習の時間」が導入されるにあたって、どの学校も，どの先生も関心のあることだと思います。提言の質議が終わった後、色々な先生から国際理解教育に関わってたくさんの意見が出されました。その中で何年も国際理解教育に携わってきた先生方が常に先を見つめ、新しい国際理解教育を目指していることにとても感動し、おおいに刺激を受けました。

「国際理解教育は変わるべき」、「教師が変わっていかなければならない。」という言葉を何回も聞きました。教科の中で国際理解教育をやろうとしても限界がある、教科にはその目標があるので少なからず制約を受けてしまう。だから、今が国際理解教育を変える機会ではないか、総合的な学習の時間の導入により授業がグローバルに展開でき、内容的にもっとダイレクトに国際理解に関わる授業をしていくべきではないか、など積極的な意見が数多く出され、話を聞いているだけでも参加した価値はあったと思います。

「いつでも、どこでも、だれでも、むりなく」国際理解教育を進めるにあたって教科を含めた全教育活動で土台・素地作りをし、その土台をもとに総合の時間でダイレクトに国際理解教育についての授業を積み重ねていく。これからはこの両輪がしっかり機能することが大切だと思いました。

総合的な学習の時間が導入され、今まで以上に国際理解教育が注目されると思いますが、教科の時間こそ今まで以上に大切にしていかなければならないと考えました。しっかりとした土台なくしては、国際理解教育をダイレクトに活動させる意味が半減してしまうからです。

私ばかりではなく参加された多くの先生方も大きな財産を持って帰られたのではないかと思います。

報告

第２１回北海道国際理解教育研究大会
胆振・室蘭大会

【課題別分科会　第２分科会に参加して】

苫小牧市立凌雲中学校
教　諭　　鈴　木　学

テーマ

地域社会と連携する国際理解教育の実践

協議の柱	・地域の環境や人材を生かした国際理解教育の実践		
	・地域社会と共に歩む国際理解教育の実践		
提言者	西村	榮基	（斜里町立峰浜小学校教頭）
	神	國朝	（苫小牧市立泉野小学校教諭）
	降旗	栄	（厚岸町立厚静小学校教諭）
助言者	峰	良夫	（室蘭市教育委員会指導室長）
	笠松	信一	（幕別町立幕別小学校校長）

研究協議の様子から

３名の提言者より各校の実践に基づいた提言があった。神先生は、地域に住む外国人の人材リストを作成し、日常的な授業の中でごく自然な「ふれ合い、学び合い」の教育実践の報告があった。降旗先生は、ドイツ人のコニーさんとの交流を通して、非言語的コミュニケーションの大切さを教え、子どもたちの視野を広げる実践が報告された。また、西村先生は困難が多いと思われがちな小規模校における国際理解教育を創意と工夫を生かして推進している実績が報告された。

いずれも　地域に根を下ろし、積極的に地域の素材を教材化する試みで、これからの学校のあり方をも示唆する内容であった。そのため、分科会参加者からも多くの質疑や意見が出された。特にこれらの実践を自らの地域・学校で取り組むにはという観点での話し合いが活発になされた。また、実践上の障害についても討議された。費用はどうするか、交渉はどのように進めるかなど、実りの多い話し合いになった。

最後に二人の助言者によって研究協議のまとめが行われた。これからの国際理解教育はまさに地域の中で実践されるべきであり、その環境が整うのを待つのではなく、実践者がいかに積極的に足を踏み出すかにかかっているという言葉は、参加者に大きな共感とこれからの方向性を与えてくれた。

報告

第２１回北海道国際理解教育研究大会
胆振・室蘭大会

【課題別分科会　第３分科会に参加して】

苫小牧市立啓北中学校
教　諭　　青　山　孝　博

テーマ
国際交流や国際協力を通した
国際理解教育の実践

会場には、各地域からの３４名の参加者と３名の提言者、そして司会者などを合わせて４２名が集まった。室蘭大谷高校の提言から第３分科会が始まった。

○ 提言者	藤　田　真理子	（室蘭大谷高等学校教諭）
	鈴　木　　毅	（帯広市花園小学校教諭）
	佐　藤　圭　一	（札幌市立白楊小学校教諭）
○ 助言者	堀　川　俊　司	（苫小牧市教育委員会指導主事）
	国　安　民　雄	（北見市上常呂小学校長）
○ 司会者	田　中　紀　文	（苫小牧市立苫小牧東小学校教頭）
○ 運営者	青　山　孝　博	（苫小牧市立啓北中学校教諭）
○ 記録者	松　本　太　志	（苫小牧市立光洋中学校教諭）

◇　討議の柱　◇

（１）　異文化や人間のすばらしさへの共感を深める国際交流の実践
（２）　世界の人々と共生を目指す国際協力の実践

１．　提言者より

（１）室蘭大谷高等学校における国際理解教育実践報告　藤田真理子　教諭

国際理解教育の６つの実践を始めて３年が経過した。本校は、高等学校であるので、小・中学校の取り組みをさらに発展できるような教育を心がけている。

① 留学生の受け入れ
② 留学への取り組み
③ 海外修学旅行への取り組み
　来年度からは全員参加で海外コースに参加させる。
④ 姉妹校提携への取り組み
⑤ 短期語学研修への参加

『自己表現力』を身につけさせられることも大切である。

⑥ 英会話授業への取り組み

アメリカから、ネイティブスピーカーの先生を招いて授業を行っている。生徒と音楽を通して交流したり、いろいろな工夫によって生徒の英語力向上を図っている。

※ 提言の内容に関してＶＴＲを用いて、取り組みの様子を紹介していただいた。

（２）地域の教育力を生かした国際理解教育

“Think globally,Act locally"　**鈴木　毅　教諭**

① 十勝の国際理解教育

『いつでもどこでも誰でもできる』国際理解教育の推進。『国際社会とのつながり』を焦点に。

② 花園小学校における実践

開校以来１９年間、国際理解教育に取り組む。『交流を通した国際理解教育（特別活動）』、

『授業における国際理解教育（教科･道徳など）』。

ア：花園インザワールド～自国理解･他国理解を目的とした活動

『生徒の手で作られた』企画、創り上げていく活動であることが大切と感じる。実践の中から国際理解教育の成果が見られる。

イ：帯広市の『講師派遣事業』ー　国際理解教育講師派遣事業＝知識を教える事業だけでなく、国際理解教育「指導助手」派遣事業＝体験をともにする事業が行われている。

（３）朝鮮人小中高級学校の子供たちとの交流を通して　佐藤　圭一　教諭

札幌の国際理解教育研究会での授業発表について報告。朝鮮小中高級学校は、北朝鮮の２、３世の生徒たちが通う学校。札幌市立新栄小学校との交流がある。

①国際理解教育に必要なもの

異文化と出会い、その中に生徒自身が『課題』を見つけ、それを解決していくことが必要。長いスパンで学習をくみ上げ生徒の力を育てたい。現在の子どもたちは『他人と積極的にかかわっていく』ことが苦手である。自分に対する自信を身につけられる授業作りが必要である。

② 朝鮮人学校との交流授業について

１回目は、『お互いの国の遊びの交流』を、２回目では話し合いの中から生徒が、『お互いの国の伝統的な遊び、伝統的な料理を交流しよう』ということになった。現在の遊びでは、生活環境に違いがないために双方とも同じ遊びになってしまう。伝統的遊びに目を向けることで、子どもたちの『自国理解』が始まった。子どもたちが、自国の伝統的遊び・料理について調べたり、調べたことをどう相手に伝えていくかについて時間をかけて取り組んだ。その後に第２回の交流を迎え、「自国理解」、「相手にわかりやすく伝える」ということを軸に取り組んだ。

２．　研究討議

各地域、各校の実践の紹介も含めて、時間いっぱいまで話し合いは進められた。司会の田中　紀文（苫小牧市立苫小牧東小学校教頭）先生は、多くの参加者が意見交換できるよう配慮され、提言内容　や討議の柱との関連にこだわらずに様々な考えが出された。

○　花園インザワールドでは、その事前・事後の取り組みはどうであったのか。（質問）
　◇　毎週行われる児童会活動が中心。委員会発足の５月から取り組みを行った。事後については、次年度の取り組みとして、単元開発も同時に行い、今後は総合的な学習として位置付けていく。
○　朝鮮人学校が近くにあるということがうらやましい。苫小牧市内でも、異文化の交流を模索していきたい。子どもたちのコミュニケーション能力の不足に対する方策が見え始め、参考になった。
○　『交流できる環境』を多くの学校で実現していくことが必要。その交流の『元になる部分』の研究も必要である。東西間の文化・言語などの研究から、『一歩踏み込んだ』文化の元になるものを子どもたちに還元したい。それによって、『いつでもどこでも誰でも』できる国際理解教育につながる。提言から、異文化交流は他国交流にとどまらないことを知った。
○　アジア諸国との交流について、『歴史的な背景』をどのように扱ったのかを知りたい。（質問）
　◇　取り組みの中には位置付けていない。交流では、知りたいのは国のことというよりも『○○ちゃんのこと』。知識としてでなく、具体的な交流からスタートすることが授業者の意図である。
○　国際理解教育の目的は、日本がほかの国々と仲良くやっていくことにある。国について知識として身につけることも大切だが、『友達になる』ところから始めることが大切であると感じる。
○　すべての学校に、他国の学校と交流できるような条件整備を、行政が行っていく必要を感じる。
○　『待ちの姿勢』は問題。いかに個々の教師がその機会を作っていくかが大切ではないのか。
○　総合的な学習として、１学期には異年齢理解、２学期には職業理解という実践をしている。
○　異文化理解ということが、外国人との交流だけなのかについて議論はないか。（司会者）
○　単に交流することがすべてではなく、自己表現力を子どもたちに自身につけさせるかを考えることも、異文化理解・交流には非常に大切なことである。

３．　助言者より

助言を頂いたのは、堀川　俊司　指導主事先生と国安　民雄　校長先生からだったが、実践経験も豊富な国安先生からは、英語教育との関わりの中から、国際理科教育のこれからの方向性について、堀川先生からは、本研究大会の副題にもある『共生』という視

点が､国際理解教育では第一に重視しなくてはいけないテーマであるとの助言を頂いた。

（１）国安民雄　校長

大谷高のホームステイと同じような体験を、自身が引率として行ったことがある。その中で、自身のこれまでの英語教育の反省点を感じた。単語・文章読解についてはすばらしいが、書き言葉･読み言葉で覚えた言語は『話し言葉』とは異質である。これを理解して語学教育にあたることが、子どもたちにとって大切ではないか。

札幌・帯広のレポートについて、「３Ｆ（ファッション･フーズ･フェスティバル）」から「３Ｓ」になってきていることを感じた。３Ｓとは「スポーツ」、「スタディ」、「サロン」である。これらの方向性に向かっていくことが、総合的な学習とあいまって今後の国際理解教育にとって重要なキーワードになっていくと考えられる。

（２）堀川指導主事

『共生』というサブテーマが非常に重点がおかれている。Ｈ８の中教審答申の中で、『共生』が重要なポイントして扱われている。しかしながら、これまでは『同化』であって『共生』ではないのかと疑われる。同化とはより大きな文化が小さな文化を吸収していくということである。これからは『共生』大切であるとされ始めた。

この共生は３つに分けられる。『自然との共生』『他者との共生』『自分との共生（肯定的自己概念の育成）』である。国際理解教育では、主に他者との共生・自分との共生に主眼が当てられる。特に、時運との共生について、日本ではこれまで協調性が大事にされてきた。これからもそうだが、これからの協調性は『個』を基本とした上での協調性である。これがなし得れば、子どもたちの中に、国際理解･異文化理解の力がついていくのではないか。本日の提言の中では、これらに対する今後の方策がおおく示唆されていた。

報告

第２１回北海道国際理解教育研究大会
胆振・室蘭大会

【課題別分科会　第４分科会に参加して】

岩見沢市立幌向小学校
教 諭　　石 塚 信 彦

テーマ
小学校における外国語の現状と課題
（各地における国際理解教育の現状と課題）

第 4 分科会では全道各地から約 50 数名の参加者が集まり、熱のこもった論議が交わされました。そこで、分科会の概要を紹介したいと思います。提言は以下の３つでした。

１．大滝村立優徳小学校　三浦　隆文先生　「交流を基盤とした国際理解教育」

国際理解教育として AET による国際理解の授業，村内の英語弁論大会、カナダ親善派遣団に取り組んだこと。

２．標津町立薫別小学校　山崎　　守先生　「薫別小学校英語教育の取り組み」

平成 11 年度より JET、担任、AET の 3 者で TT 方式の英語活動を始めたこと。具体的には聞く，話すを中心とし、歌や遊び、ゲームを中心とした活動に取り組んだこと。

３．札幌市立三角山小学校　松本　美樹子先生　「三角山小学校における外国語教育の実践と課題」

三角山小学校では 1 年生が「ふれあい」をキーワードとして、表現活動を中心に英語とのふれあいを実践してきたこと。楽しむことを最優先とし、ALT に頼らず、毎日の無理のない取り組みを目指してきたこと。

討議の中では、まず、小学校の中で英語教育が果たして必要なのかどうかという論議がありました。これについては３つの立場があること。

１、小学校の段階からぜひ英語教育を進めて欲しいと考える立場。
２、国際理解教育の入口としての英語教育の立場（従ってこれは英語に限らない）
３、総合的な学習の立場（英語とも限らないし、外国語が入らない場合もある）

以上３つのそれぞれの立場により、議論が展開されたように思えました。

論議の中では小学校の段階で取り組んでみて様々なメリットがあったことが出されました。特に指摘されたのは、聞く力の向上と、伝えようとする意欲の向上そして異文化への興味・関心の高まりでした。また、障害児学級での英語の取り組みも紹介され、英語が日本語を正しく学ぶための入口となっているとの指摘もありました。

また，英語活動を進めるに当たっては、複数の小学校から中学校に進学する場合、格差が生じる恐れがあり、そのため小中の連携が大切であること。英語は様々な特色ある教育の１つであって、あくまでも地域性や父母の願い、子どもの願いなど、自分たちの土台を見据えてから取り組むべきとの意見がありました。

最後に助言者からのまとめがあり、国際社会に生きる日本人の視点から、英語に取り組むことが大切であること。将来的には次期の指導要領に英語が入る可能性が高いこと。総合的な学習の中で小学校が一斉に英語に取り組むことが果たして総合的な学習のねらいに沿ったものになるのかどうか十分検討する必要があること。それから、これまでは中学校が英語との出会いの場だったのが小学校になるにあたって、人との出会いと同様に大切にしていきたいとの助言者からのお話がありました。

今回第 4 分科会では初めて小学校における英語教育（活動）について、テーマをしぼった形で持たれました。そのため、論議が焦点化され、活発な論議が展開されました。来年度の分科会にもぜひ参加したいと思える分科会でした。

各地区の活動の様子から

『平成１２年度空知国際理解教育研修会の報告』

７月１０日に高野和男指導主事をはじめ２０数名の参加で、平成１２年度の第 1 回研修会を終えることができました。当日は岩見沢市自治体ネットワークセンターの３階にて月形町外国語指導助手のロイヤル・L・クリストフアー氏から「ALT から見た日本の子どもたち」というテーマでスピーチをいただき、その後会場の参加者との間で意見の交流を持ちました。以下がその報告です。

ゲストの紹介

ロイヤル・L・クリストフアーさん（月形町外国語指導助手）
アメリカ・イリノイ州シカゴ出身
留学生として新潟市在住６ヵ月
趣味は、柔道、陸上１００m、料理
日本語は大学で２年間学び、その後は独学する。
９８年７月から月形町外国語指導助手として活躍中

《 スピーチの概略 》

言語の習得は、より若い段階が望ましい。
１、習得の力が強い。２、文化を喜んで受け入れることができる。
３、無理やり学ばせようとしなければ、向上していく。
４、活動的で、好奇心に満ち、はにかみがない。
以上の理由で、英語を小学校で教えることは良いことである。
授業の様子のビデオを２本紹介。

《 意見交流の概略 》

ロイヤル氏ーもし私が小学校で日本語を勉強していれば，もっと英語と同じ位大丈夫になったと思います。２年生ぐらいから、外国語を勉強していれば、母国語は忘れないと思います。早くから外国語を勉強した方がいいと思います。

舟崎氏ーシカゴでは英語の他にどんな外国語を勉強しますか。

ロイヤル氏ー例えばスペイン語です。アメリカでは英語とスペイン語の両方習います。

スペイン語もペラペラになり、英語もペラペラになります。早く習うのに問題はないと思います。

小学校では私は文法は教えません。小学校では楽しいことが一番です。今日はロイヤルさんが来るというようにみんなが楽しみにしてくれることが大切です。

中学校では１年生が一番元気です。２年生はちょっと恥ずかしがり、３年生は何も言わない。試験が関係あるのかな？もし授業が楽しくやればみんな大丈夫と思うのですが。例えば私が授業を楽しくつくり､他の先生が文法というように協力してやれたらと思います。

舟崎ー日本の先生とシカゴの先生の違いは何ですか？

全然違います。もし子どもがわからなかったら別の部屋に行ってもうちょっと説明があって、もっとやさしい宿題がありました。先生たちはやる気を与えてくれました。子どもたちに興味を持たせること，それが私達の責任だと思います。

授業でも、少しテキストを離れて、何をやりたいのか、何が好きなのか、子どもたちの意見や考えを調べて準備します。

織田ーなぜ日本の人々は英語に苦労しているのでしょうか。

ロイヤル氏ー私の意見では文化が関係あると思います。それでももし、英語を習う意味を教えたら，多分みんなはなるほどと勉強すると思います。

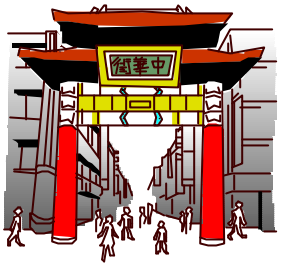
本当は英語だけじゃなくて、ハングル語、中国語いろいろな外国語を教えたらいいと思います。どうして英語だけなのか、スペイン語など、みんな平等に選ぶのが大切です。英語は大事だけど，みんな平等です。子どもにチョイス感があれば言いと思います。

《 高野指導主事からのまとめ 》

小学校で、総合的な学習の時間でロイヤルさんのような英語の授業が取り入れられることがありますが、ゲームを取り入れたり、あいさつや音声を使った活動を大切にし、文化や言語にも取り組ませることが大切かと思いました。

教えるとすぐ結果なり，成果を求めないことが大切になると思うし、遊びの要素を取り入れ、英語っておもしろいという動機付けが大切と思いました。学級では、ALT に日本の先生がどう協力していくのか、どう支援していくのかが大切かと思いました。

ALT や地域の外国の方たちの人材発掘や校内の環境整備も大切になると思います。国際理解の一貫としてやるときは、図書室や校内の掲示に国際理解のコーナーを作るなど、そのような動機付けのための環境作りも大切かと思いました。



全国大会に参加して

北海道国際理解教育研究協議会研究部長
札幌市立月寒小学校　教諭　中　村　淳

第２７回海外子女教育・国際理解教育研究大会が８月３日、４日の二日間にわたり、神奈川県横浜市で開催された。２１世紀を目前に控え、大会の運営に様々な新しい試みが工夫されていた。特にテレビ会議の開催、２１のコーナーに分かれてのワークショップ、そして３９本のレポート発表と、派遣教員の集まりではなく、国際理解教育の研究の場として盛り上がりのある会となった。

１，大会の主題

２１世紀を共に生きる地球市民の育成

この研究主題の背景には、環境問題、南北問題などの地球規模の課題がますます深刻になってきた背景に共生と地球市民の育成を２１世紀の教育の課題だと真正面から捉えたためだと考えられる。

特に、「異文化を理解する」教育から、「多文化共生」のための教育への転換を主張していた点は注目すべきである。すなわち違いを認めるだけでなく、互いの文化を認め合い、尊重し合って生きていくことができる社会の実現が国際理解教育のこれからの目標だとしっかり位置づけたためだと考えられる。

また、今回の大会で初めて「地球市民」という言葉が研究主題の中に登場してきた。参加者の中でもこの言葉はごく当たり前のように語られていた。このことは、国際理解教育でもとめていく「生き方」として「地球市民」を共通のものと捉えたためであろう。

このように、今大会はミレニアムを意識し、２１世紀の国際理解教育のあり方を主張した大会だということができる。

２，大会の内容から

コミュニケーションと市民参加

この大会では、今までの大会では見られない様々な試みが数多く見られた。これらの試みは、これからの私たちの研究推進にあたって大変参考になると考えられる。

特に、インターネットの利用、外国語教育の実践発表、また外国籍児童生徒に対する指導に見られるようにコミュニケーションに注目したこと、ワークショップの開催に見られるように NGO との連携した大会運営は、学校現場だけではなくまさしく市民参加の教育の先駆けになるものと考える。

ここでは、今回の大会の様子の中で、「テレビ会議」「わくわくワークショップ」「分科会」の様子を報告したいと思う。

（１）テレビ会議の開催

今回の大会の目玉ともいえる会議であった。大会会場と実際の教室現場をインターネットで結び、リアルタイムで授業に参加しようという試みであった。大会参加者は会場

のテレビ画面を見ながら、遠く離れた授業を参観し、授業後は、会場と現場とを結びながら児童や、父母との討論会に参加した。

今回は、今話題になっている「日本語指導教室」と「シドニー日本人学校の国際学級」の子供たちの様子を実際に見ることができた。

この試みを通して、一番の収穫はインターネットの双方向の交流が持つ魅力を実感したことである。遠く離れた相手との「討論」は、「距離」の壁を越え情報にリアリティを与えてくれた。

（２）わくわくワークショップの開催

このワークショップの開催は私たちの研究への新たな示唆を与えてくれた。従来の研究大会においては、研究者からの報告が主であり、参加者はその報告を聞くというスタイルが主流であった。

しかし、今大会では、参加者自らが「学習者」の立場に立ち、主体的に学ぶ場を参加者に提供してくれた。私が参加した会場は、バナナの繊維からはがきを作るというものであった。いつも「教える」立場にいた私にとって「生徒」の立場に立つのはとても新鮮であった。こんなことから地球が見えるんだというアイディアをたくさんいただいた。

また、このワークショップのほとんどは NGO の人々の支えで開催されていた。研究大会を地域社会との交流の中で開催しようという試みは、国際理解教育を現実の社会と密接な関わりをつくる上でとても有効だと考える。

おもなワークショップ　　会場数　２０

① ハロー　イングリッシュ
② 地雷教室　　ピースボート　　カンボジアチーム
③ いつもは出会い　ともに生きる　　グローバル市民基金
④ 青年海外協力隊　帰国隊員と共に　　神奈川県青年協力隊 OB の会
⑤ 地球市民にできること　　水牛家族

（３）分科会

第１分科会	海外児童生徒の現状と課題
第２分科会	帰国子女・生徒教育の現状と課題
第３分科会	外国人児童・生徒教育の現状と課題
第４分科会	国際理解教育と総合的な学習の時間の取り組み
第５分科会	地域の国際化と地球市民育成への取り組み

今回の大会では、５つの分科会において４０近くの報告がされた。従来の大会と比べても、その数は二倍近くになる。そのうち１５が第４分科会というから、総合的な学習における実践が着実に行われていることがうかがえる。

すべての分科会に参加することは無理であったが、小学校における外国語教育に実践報告の分科会では、楽しむことをまず考え、ゲームや踊りを通した英語活動の報告がされ注目を浴びていた。やはり、小学校における外国語教育の実践は試行錯誤の状態のようである。しかし、外国語を教えるのではなく、外国語を通してコミュニケーションすることの楽しさを経験させていくというのだという考え方は共通の考え方のようである。

また、この会を通して、「ニューカマー」ということがこれからの国際理解教育のあらたな問題点として浮かび上がってきた。外国との交流が進む中で、日本語をまったく理解できない「外国人児童・生徒」の指導は、「内なる国際化」が進む現状において重要な教育問題となりつつあるようである。

最後になるが、各地区の研究担当者の会において、初めて全国の研究主題が提案されるなど、大会は国際理解教育の実践研究の場としての性格を強く打ち出してきたといえる。我々の研究をどう全国の研究と交流していくかも考えていく時、このことについても考えていかなければならないであろう。

ＩＥ フォーラム

８月に横浜で行われた第２７回全国大会に参加する機会を得た。「地球市民を育てる」ことを研究の柱として、２１世紀における国際理解教育の方向や在り方を問う研究大会となった。

この大会に参加して感じたことであるが、国際理解教育は、「目標」ではなく、国際理解教育をしていくことでこんな子どもの学びの姿を作りだせるのだという「結果」を問うようになったということである。我々の先輩たちが、「いつでも、どこでも、だれでも」と国際理解教育の理念を教育現場で実践したことが実を結び、我々の研究が教育現場においてしっかり根をおろし、新たな局面を向かえたためだろう。

そして、我々の実践が「子どもの姿の変容」という質を問う段階へと高まってきたといえよう。目標に基づいて授業を作ったから国際理解の授業なんだといくら主張しても、子ども達の姿として表れなければ仲間の賛同を得られないのである。今回の全道大会の授業の話し合いでも、国際理解としての主張の具体的な表れを問う質問が数多くだされていたことからも、このことは間違いないだろう。

私たちの実践は、今の社会を理解させることでとどまってはいけないのである。子ども達一人一人が明日の社会をイメージし、その具体化に向けて対象に対して働きかけている姿を作り出さなければならないのである。「なるほど、国際理解教育の授業をするとこんな学びを子供たちは作り出すんだ。」と納得させられる授業作りが求められているのだ。

図書紹介

公立学校でやってみよう！　英　語

―「総合的な学習の時間」に進める国際理解教育

吉　村　峰　子　　１９５８年生まれ
ＧＩＴＣ代表
グローブ・インターナショナル・ティーチャーズ・サークル
草土文化社

２００２年にむけて「小学校英語」に対する関心が益々高まりを見せている。ALT などの外国人教師と協同しながら毎週授業を実施しているところもでてきた。しかし、「なぜ、小学校に英語なのか。」という素朴な疑問に対して明確な答えがだされているとは言えない。この本で著者は、国際理解教育の一環としての英語教育を進めることを主張している。そして、子ども達の自己尊重感を育てながら、世界の人と人とをつなげる言葉としての英語を学ぶことを我々に問い掛けている。英語という言葉を学ぶのではなく、英語を通して世界の広がりを子どもに実感させようという試み、そして、日本語で英語の授業をという提案は、英語に恐怖感を抱いて我々にとってのショックと刺激を与えてくれる。

海外からのお便り

シンガポール日本人学校中学部　光成英二教頭先生より

こんにちは。

私はシンガポール日本人学校中学部教頭の光成英二です。

今年の春に北海道（網走管内）より派遣されました。現在この中学部には渡島管内より間瀬教諭も２年目で活躍しています。北海道はもうすっかり秋の気配になっていることと思いますが、こちらは相変わらず暑い毎日で、外に出れば汗だくです。時々スコールの雨も降り湿気もかなりなものです。

本校は生徒数５４０名の中学部単独校舎で、市内には小学部２校もあり、合わせると２２００名にもなる世界一の学校です。スクールバスは本校だけでも１８台あり並んでいる姿は壮大です。中学部は２年生の修学旅行（タイのバンコク）が終わり、１１月１１日の開校３０周年記念式典の準備に追われています。また１７０人の３年生の進路指導も本格化してきました。受験校の数は世界１００校にも渡るため、その事務量は膨大なものです。このようにすべてにおいてスケールが大きい学校です。

以上近況をお知らせしました。

グァテマラ日本人学校　佐藤寛之先生より

前略

協議会の皆様方におかれましては、お元気でご活躍のことと存じます。私は平成１１年度に十勝管内上士幌町（萩ケ岡小学校）より中米はグァテマラ日本人学校に派遣されております佐藤寛之と申します。

さて、遅れ馳せながらのお礼で申し訳ありませんが、いつも定期的に会報をご送付いただき誠に有難うございます。派遣前に説明会などのお誘いをいただいたのですが日程が調整できず、結局皆様方とは一度もお会いすることなく当地に赴任致しました。

昨年度（派遣一年目）はスペイン語の習得と当国での生活に慣れることに精一杯で、なかなか納得のいく実践が進められず会報をとおして皆様方のご活躍を拝見させていただくばかりでした。しかしながら、今年度は少しずつですがゆとりをもてるようになり、大変稚拙ながら当国での生活の様子や日本人学校での取り組みなどをＨＰにまとめ発信することができるようになりました。派遣前は、パソコンに触れたこともなく半ばアレルギー気味の私でしたが、こうして在外の地に生活しておりますと、その必要性と有難さを実感している次第です。

この度、ＨＰを紹介させていただきますことが、貴会へのよき情報提供となり派遣に関心をお持ちの教員の方々へのご参考となれば幸いに存じます。

ＰＳ．次年度は本校の児童生徒数が激減するため、どの程度実践が進められるか不安な状況です。治安悪化などの問題もあり、緊張感を保ちながらの生活ですが、各国に派遣されている方々の活躍を思い浮かべつつがんばらねばと思っております。貴会会員の皆様方のご健康とご活躍をグァテマラよりお祈り申し上げます。

草々

ＨＰ「さとごんの館」；http://www.geocities.co.jp/NeverLand/2038/